

## 第 3 章

---

### 一日のリズム

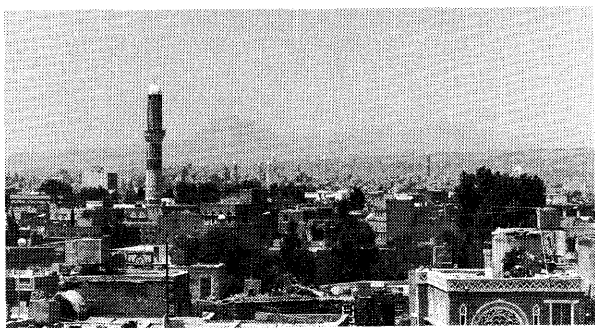
アザーン

イエメン人は一般にかなり敬虔なイスラム教徒である。そのなかでも特に敬虔な人たちは夜明けヘファジュールの礼拝を欠かさない。よく知られているように、イスラム教徒は日に五回礼拝することが望ましいとされていて、礼拝ヘサラーはイスラム教徒のなすべき「五つの柱」のうちでも大黒柱のようなものである。だからイエメン人は確かによく礼拝をする。一日の活動も、やはり礼拝から始まるのが理想的なのだ。

とはいえ、日に五回の礼拝で、最も実践しにくいのがこのヘファジュールの礼拝である。夜明けの礼拝といっても、太陽が顔を出してから礼拝するのではない。礼拝の時刻は日の出の時刻とは違い、あたりはまだ暗く、むしろ黎明とか暁（あかつき）の礼拝、といったほうがぴたりする。

高原の朝はことさら冷える。サナアでは冬には霜柱が立つこともあるのだ。そういう冬の朝、まだ暗いうちに寢床から起き出してモスクまで礼拝に行くというのはなかなか難しい。昼に二回分やるから勘弁してほしい、と思うのが人情である。

日に五回の礼拝時にはモスクから礼拝への呼びかけヘアザーンが響くのだが、夜明けのアザーンは夜のしじまを突き破って突然鳴り響くので、初めて中東を旅行する外国人はびっくりして必ず飛び起きる。「何事か」とホテルの窓のカーテンを開けてみるとまだあたりは暗い。これが例のアザーンだと気づいて再びベッドに入ってもなかなか寝つかれず、初めのうちは不



サナアのミナレット。一つひとつのミナレットから別々のアザーンが響きだす。

眠症気味になる人も多い。それでも慣れというのは恐ろしいもので、いつかこのスピーカーを通したアザーンの声も気にならなくなり、子守歌代わりに聞きながら眠れるようになる。

アザーンは必ず「アッラーは偉大なりヘアッラーフ・アクバル」で始まり「アッラーのほかには神は無し」「ムハンマドはアッラーの使徒である」と続く。そのあとに続くせりふは礼拝の時刻や、宗派によって多少内容が違ってしまうが、夜明けの礼拝では特に「礼拝は惰眠に勝る」という一節が入っている。「どうしようかなあ、行かなきゃいけないんだけどな、もうちょつと寝たいな」と思っ毛布をかぶっているイスラム教徒にはこたえるフレーズである。

夜明けのモスクには、じいさんが多い。サナアではわれわれ異教徒はモスクの中には滅多なことでは入れないので、礼拝中の姿をまじまじ見ることはできない。しかしときどきモスクの入口の一つが開いていて、並んで礼拝している

後ろ姿をかいま見ることがある。礼拝を終えてゆっくり腰を延ばし、眠気を覚ますような感じで両方の手の平で顔をこしこしこするような仕草をしているときのじいさんの顔といたら、本当に幸せそうなのである。そういう顔を見ると、われわれでも「じいさんの上にアッラーの



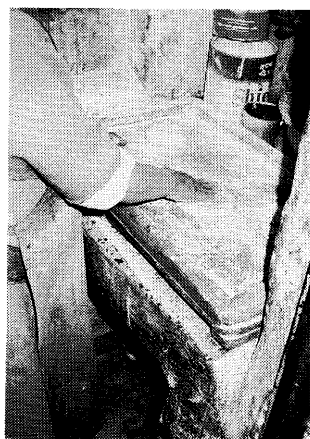
サナアの大モスク（ジャーミア・カビール）。  
建立はヒジュラ暦4年。イスラム世界でも屈指の古さを誇るモスクである。

加護がありますように」と心底思わずにはいられない。

そうしたじいさんが、礼拝後そのまま残ってモスクのホールでコーランでも読もうかとあぐらをかき、X字型の見台にコーランを載せる頃には、あたりもだいぶ明るくなっている。ヌクム山のゴツゴツとがった薄茶色のシルエットが真つ青な空を背景に浮かび上がると、サナアは朝である。

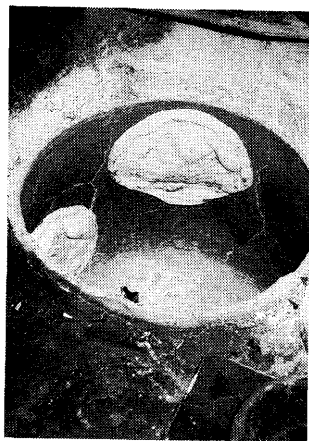
最近では礼拝を済ませてから一眠りする人もいるが、そのまま簡単な朝食をとって仕事を始めるのが本式である。だからサナアの朝は早い。特に政府のトップクラスの人はとりわけ朝早くから働く。「他の人間が活動していないから、余計な電話や来訪がないので仕事はかどるんだよ」というのがその理由。イエメンも途上国の常として、重要な政策決定のできる権限と能力は一部の優秀な人に集中しがちである。われわれ外国人が仕事で用のあるのもそういった人たちだから、彼らと会おうとすると約束をとりつけるのが至難の技となる。約束していても急に大統領に呼ばれたり、首相に呼ばれたりしてすっぱかされることも多い。そこでどうしても政府高官に会おうと思ったら朝七時頃に役所に行くのが最も確実というのがサナアでの経験則である。

明るくなつて最初に店を開くのは朝食を出すレストランである。こうしたレストランで朝食をとるのは、主として家族がサナアにいない人たち、つまり単身赴任者である場合が多い。一



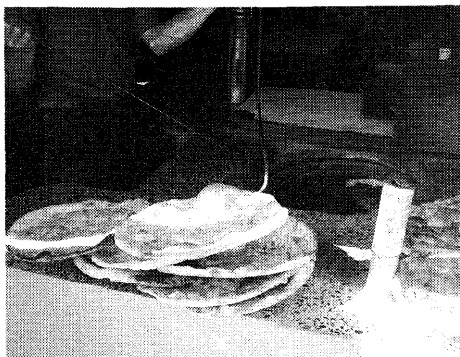
ホブズの焼き方

①小麦粉を練ったパンの下地を平たくつぶして油を塗る。



②伸ばしながら広げ、窯（タヌール）の壁面にはりつける。窯の下は直火である。

般にイエメン人は家に調理をしてくれる女性がいるなら、できるだけ外では食事をとらないようにしている。お金がかかることよりも「衛生的でない」からだと言う人も結構いる。いずれにせよ人々は出身地域ごとのある程度決まった味つけに慣らされてしまっていて、物心ついてからそれ以外の味のモノを食べたことがない。そこでレストランなどに行っても味つけが違くと舌が受けつけないのである。若者が勉強や仕事のために田舎からサナアに出てきても、どのレストランでもいいというわけにはいかない、できるなら同郷の人のところに居候し同郷の女性を作ったモノを食べたい。それをできない者が、しかたなくレストランに行くことになる。



③焼き上がり

普通の家の朝ごはんは、たいてい砂糖たっぷりのミルクティーにぺたんこパン「ホブズ」を浸して食べておしまいである。「ホブズ」はパン焼き釜（日本人にはインド料理のタンドールと言ったほうがわかりやすいかもしれない）の内側にはりつけて焼く丸いパンで、はりついた面は釜の熱で、もう一方は釜の中で燃えている火の熱で、両面から焼かれる。焼き上がると中は中空になるのである。最近では小麦だけのももの多いが、キビ・アワなどの雑穀が混ざっているほうがおいしい。このパンの焼き方は中東一帯に共通である。

「ホブズ」に胡麻がまぶしてあれば、かなり栄養が補給できるので、朝ごはんとしては上出来である。由緒正しいイエメン家庭では、パンは自家製であるが、朝っぱらからパン焼きカマドに火を入れるのはもったいないから、普通の家で朝食食べるのは昨日の残りである。紅茶のためのお湯はボタンガス（日本で言えばプロパンである）のこんろで沸かす。たいていの家ではあまり朝から調理はしない。

一方、レストランに行けば、調理した料理が朝から食べられる。もちろん朝のメニューは手の込んでない簡単な料理で、バラエティーも少ない。日本の朝定食とか、モーニングセットに当たるのが「ヘフル」に「キブダ」に「ヘダッカ」である。フルはひよこ豆のトマトソース煮、たまに玉ねぎが入っているかもしれない。キブダは牛、羊の肝臓を使ったレバニラ炒めと思えばだいたい当たる、ただし、じゃが芋の細切りとシシトウ「ヘビスバス」が入っているのが普通である。ダッカは挽き肉と細切り野菜の炒めもの。これに卵を加えた「ヘダッカ・マア・ベイズ」は挽き肉の卵とじである。この三品はたいいていのレストランにある。というよりも朝はほとんどの店でこの三品しかやってない。ただ卵は入っていない場合が多い。レストランに来る単身者は肉体労働者が多いから、一般家庭での朝食よりも栄養のあるメニューになっている。サナアには単身者が増えているので、最近はレストランもずいぶん流行っているようだ。

商店や役所などは八時頃に仕事を始めるのが一般的だから、流行っているレストランが最初にラッシュを迎えるのは単身者がやってくる七時から八時にかけてである。二度目のラッシュは九時から九時半にかけて。これは妻帯者でも寝坊してあわてて出てきたか、カミさんが寝坊したかで、いずれにせよ朝飯抜きで出てきた公務員が、腹ごしらえに仕事を抜けてくることによるラッシュである。見ようによれば、まことに嘆かわしい光景ではある。同僚のためにホットドッグのようなパンに肉や野菜を詰めてテイクアウトする親切な者も多い。だからこの時



間は役所の近くのレストランが流行る。

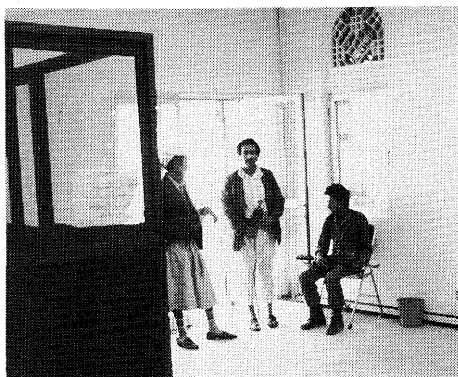
腹ごしらえが済んだら、ようやく仕事にとりかかる。

#### 午前中

午前中は仕事の時間である。勤め人で午前中に仕事をしないような者はイエメンでは怠け者である。その日一日有意義な仕事ができるかどうかは、朝のうかが勝負なのである。日本のように昼過ぎにようやくエンジンがかかるようなペースでは、イエメンでは仕事にならない。なぜなら、多くの場合、勤め人の仕事時間は、ほぼ午前中で終わりだからである。

当然のことながら、われわれ外国人が何かの用事で役所に行くのも午前中だけである。

では、役所に行ってみよう。まず最初に、われわれが役所に行って困惑するのは、目当ての人がどこにいるのかを捜し当てるのに一苦労することである。この際われわれが外国人で部屋にかかっている表札のアラビア語が読めない、ということとはさして問題ではない。地方から陳情に出かけて来たようなイエメン人だって字の読めない



公共機関の標準的な入口風景。外見ではわからないが中央の人物は役人らしい。左の人物が来客である。

い人は多いのだ。

わからなければ人に尋ねればいいのだが、誰に尋ねればいいのかにまず迷うのである。

建物の入口には自動小銃を抱えた兵隊さんがいる。彼らはたいてい徴兵で徴用されている若者であり、自分の警護している役所の内部がどうなっているかについてほとんど知識がないし、たぶん英語も話せない。それでも余計なことを言わずに、訪ねていく人の名前を何回か言ってみるのは一つの手である。運よく彼がその人を知っていれば「中だよ」とか「上だよ」とか言うてくれるかもしれない。あるいはジェスチャーで教えてくれるかもしれない。訪ねる相手が大臣とか次官など有名な人なら番兵さんも「四階」とか「五階」とか教えてくれるかもしれない。ただし地上階が一階なのか、それともわれわれにとつての二階が一階なのかは、イエメンでは一定していない。ともかく上のほうだということだけ了解して中に入ろう。

中に入っても普通、受付などという気のきいたものはない。建物が新しければ、明らかに受付用に作ったと思われるスペースがあるが、そこに人がいたためしはない。誰かそのあたりにいる人に尋ねたいが、建物の中ではいろんな人が雑多に行き交っている。どれが役人で、どれが小間使で、どれが陳情者で、どれがただの通りがかりの人だかわからない。

もっともただの通りがかりの人などいるはずはないのである。なにしろ入口で兵隊さんが入場者をチェックしており、われわれ外国人は時として鞆の中まで開けさせられるくらい、入る

のが難しいのだ。にもかかわらず、どう見てもただの通りすがりにこの建物に紛れ込んでしまったというような人が必ずいるのは不思議である。明らかに何をしているかわかるのは、役人に紅茶を出前している少年だけである。役所の近所か内部には必ずこの紅茶屋さんがあって、少年がガラスのコップを六つぶら下げるように作つてあるステンレスの入れ物を持っていったり来たりしている。彼らは建物の内外はフリーパスである。といって別にIDカードを持っていてるわけでも、胸に写真入りの名札をつけているわけでもない。顔パスである。彼らならここに誰がいるか知っているだろうが、まず英語は通じない。

彼ら以外の人が何をしている人かは外見では識別できない。公務員が名札をつけたりする習慣はない。服装で見分けようとするのは無駄である。背広とズボンといういわゆる西洋風の服装が役人で、アラブ風の裾の広がったワンピースを着てジャンビニアを差しているのが訪問者とは限らないのだ。ターバンはどちらの服装の人もたいてい巻いている。ネクタイをしめている者はほとんどいない。一般的にイエメン人は仕事中の服装に無頓着である。仕事は服装でするものではない、というわけだろう。

ただし、だからといってこちらもどういう格好でも良いかというと、そうではない。外国人はあくまでもビシッと、背広を着てネクタイも真っ直ぐしめていなければならぬ。この外見によって、われわれが外国人で、誰かに用事があって来ているな、ということが誰の目にも明



午前中の銀行。窓口は12時までである。「イエメン復興開発銀行・出稼ぎ送金専門支店」にて。

らかになるからである。そうすれば、人探しもだいぶ楽になる。

われわれが服装にこだわるもう一つの理由は、例えば滞在ビザや出国ビザの申請などの場合、窓口の役人自身の格好はでたらめでありながら、彼らはこちらの服装を見て対応を変えることがあるからである。したがってなるべく偉そう、立派そうに見える格好をして乗り込むのが手続きを迅速にしてもらうコツなのである。

さて、人探しにもどうろう。訪ねる相手が例えば局長のムハンマド・サーレハさんだとしよう。こちらが明らかに外国人で、誰かを探してうろうろしているということがわかれば、ちょっと親切で英語のできる人が寄ってきてくれるかもしれない。そうすれば英語で「局長のムハンマド・サーレハさんのお部屋はどこですか」と訪ねることができ、

運が良ければ部屋まで案内してくれるだろう。

もしそういう人が現れなければ、手当たりしだい行き当たる人に「ムハンマド・サーレハ？」と連呼しよう。「上」と言われて上へ行き、再び「もう一つ上」と言われてまた上へ、「この先」と言われてつきあたり、「三つ手前の部屋」と言われて三つ戻り、「隣の部屋」と言われて隣へ、という具合に五回くらい尋ねれば、ともかくも目当ての人のいるべき部屋にはたどり着けるだろう。一度で目当ての場所に行き当たろうなどと欲張ってはいけない。

また、聞いた答を鵜呑みにしてもいけない。なぜなら、イエメン人は根が親切なので、困っている外国人を相手に「知らない」とは言えないのだ。尋ねた人がただ陳情に来ていたおじさんでも、自分の知っているかぎりの知識で答えてくれようとするだろう。それが違っていても、決して意地悪から出たのではない。だから仮に「四階の奥から二番目の右側の部屋」と自信ありげに言われても、いきなり四階へ駆け上がるのは早計である。三階だという可能性も充分にありうるのだ。まちがいに早い段階で気づくことが迷路にはまりこまないための鉄則である。だからまず二階に上がってもう一度尋ねる。もし三階が正解ならここで間違いをチェックできる。ここでもし「やっぱり四階」というウラをとったなら三階は飛ばしてもよいだろう。四階に上ったら再び聞くこと。そして「奥から二番目の部屋」と言われたら初めて、最初の人の言ったことが本当だったと感謝しよう。

部屋に入ったらまず「ここはムハンマド・サーレハさんの部屋か」と確認すること。「そうだ」と言われたら一安心である。だが、机に向かっている人にいきなり用件を切り出してはいけない。高官になると入口は秘書の部屋で、本人は奥の部屋にいるという場合が多い。まあ、局長レベルなら普通は一部屋である。しかし机が局長の机だとしても、座っているのが本人とは限らない。本人は不在で秘書（サナアの役所では秘書といってもたいてい男である）が座っていることも多いのだ。繰り返すが、容貌や服装ではイエメン人の役職は判断できない。

そこで、「あなたが局長か？」と確認する。「いや、違う」という答が返ってくるかもしれない。「局長は？」と尋ねる。「俺も待ってるんだ」。客がたくさんいて応接椅子がいっぱいなので彼を訪ねてきた人がそこに座って待っていることだって充分ありうるのだ。

こうして三十分待つ。それで本人が帰ってくれば今日はついている。三十分後に秘書が戻ってきて「局長ならアデンに出張に出かけたよ。俺は空港に見送りに行ってたんだ」。ここで落胆してはいけない。「今日約束してあったじゃないか」などと怒っても仕方がない。よくあることだ。秘書に次回のアポイントをとれば儲けものである。「今日は彼の部屋を突き止めた、次回からは迷わずに来れるだろう。これを今日の収穫としよう」と考えられるようになれば、イエメンでの生活もそれほど苦ではなくなる。かくして午前中は過ぎていく。

## 昼

昼近くなると、午前中の人々の活動や自動車の往来で巻き上がったほこりがピークに達する。また早朝のうちはわずかな湿気を含んでいた空気も、高原の空気を射し貫いてくる太陽の熱によって乾燥しきってしまふ。夜明け前から起きて働いていれば、そろそろ疲れてくるし、おなかも空いてくる刻限である。昼の時間はやはり、昼（ズフル）の礼拝にいざなうアザーンで知る。アザーンが響けばスークの店々は扉を閉め、三々五々モスクに向かう。昼のアザーンはしたがって仕事をやめる潮時を告げる天の声である。だから朝の礼拝に行かなかった人も、昼の礼拝はめったに欠かさない。

礼拝を終えて家に帰れば昼飯が待っている。

昼飯の後はくつろぎの時間である。そのまま夜までくつろぎ続けるもよし、夕方からもう一仕



午前中の目抜き通り。車が最も混雑するのは帰宅が始まる12時半から1時頃である。

事するもよい。ほとんどの商店はひと休みした後、夕方四時半頃から再び店を開ける。これが正しいサナアの生活リズムである。いまでも多くの人々はこのリズムに従って生活している。

ところがどうしたことか公務員は、この伝統的なリズムに逆らっている。公務員の始業時間は八時であり、通常の農民・商人などに比べて朝が遅い。これで正午で仕事を終えると四時間しか働かないことになってしまう。これではいくらなんでも仕事がかどらない。かといって民間と同じように夕方からもう一仕事というのもめんどくさい。だいたいいったんくつろいでしまった公務員がわざわざまた出勤してくるものではない。それでは欧米や日本のように昼休みを一時間くらい取って、また働けばいいではないか、それが近代生活というものではないか。いやいや、それはあり得ない選択肢である。そんなふうに考えるのは「昼」というものに対する認識が足りない。

伝統的な生活リズムにおける「昼」は、仕事が終わるとき、礼拝のとき、一日のうちいちばん大切な食事を食べるとき、という三つの「とき」の三点セットであった。そして「昼」の後にはくつろぎのときがくつについていなければならない。だから仮に一時間の昼休みなどをもうけたとしても、それでは「昼」の意味をなさないのである。家族持ちのイエメン人はけっして昼飯をレストランで食べたりしない。どんなにサナアが小さな町だといっても家に食事をとり帰って、また役所に出てくるのに一時間では短すぎる。仮に二時間あったとしても、その後



にすぐ仕事にかからねばならないようでは、友人とのくつろぎの時間がもてない。うしろにくつろぎの時間が続かないようでは「昼」の資格がない。ではどうすればよいか。

「昼」の三点セットのうち札押の時間はコーランで定められているので動かせない。一方、昼飯は仕事が終わってから食べたい、さらに昼飯とその後のくつろぎの時間も切り離せない。そこでイエメンの公務員は「昼」の三点セットのうち札押だけをもとの時間においてきぼりにして、あとの二つを午後二時に移動するという離れ技をあみだしたのである。こうすれば、多少空腹を我慢し、遅い昼飯を食べるだけで、後は他の人々の生活リズムに追いつける。昼飯が遅くなっても夕方から再び働かなくていいので、民間に比べてより充実したくつろぎのときがもてるというメリットもある。昼の札押は仕事を中断して行えばよいので宗教上の支障はない。この時間は給与計算に入っているので給与上も支障がない。札押時間中に役所にやってくるイエメン人はいないはずだから窓口業務に支障はない。実質労働時間が減ることについては……支障があるという人がいないかぎり支障はない。かくして、一九六二年の開国革命以降、民間と公務員の昼の時間は多少ずれることになったが、サナアの生活のリズムはほとんど元のまま、昼は「一日のいちばん大切な食事をとるとき」「仕事が終わってくつろぎのときが始まるとき」なのである。

オフィシアワーは午後二時まで、というこのシステムをあみだした人は誰だか知らないけれ

ど（革命当初、近代化のアドバイザーとしてやってきたエジプト人たちかもしれない）、これは公務員にとつてはかなり都合のいいシステムである。始業時間が遅くなりがちなのはどこの国の公務員も同じなので文句は言うまい。終業時間についてもベルと同時に帰るというならまだわかる。しかし一時半に役所に行くとすでに人影はまばらである。昼の礼拝をきちんとすれば十二時から十二時半までかかるから、午後の仕事は実質一時間ということになりかねない。もちろんきちんと二時までやっている人もいるが、腹が減っているので残業はほほありえない。書類がたまつていくのは当然である。

もとより、彼らにも同情の余地はある。まず、単身赴任者。レストランはたいいてい二時で閉まる。礼拝を終えた十二時半から一時半までがピークであり、あとは従業員の昼飯時である。二時前になれば開いてる店でもろくなものは残っていない。また友人から食事に招待されたすると、その友人が民間人であれば、遅くとも一時には食事の用意が整っているはずである、あんまり待たせては申しわけない。共産主義時代の旧南イエメンのアデンでは、バスの運転手も公務員だから終バスは運転手が二時に車庫に帰れる時間に出る。それに乗り遅れると家に帰れないので皆その時間に合わせて仕事をやめた、という話である。

ともかく二時まで仕事をしてはもらえない理由はいくらでもあるというわけだ。もつともレストランに言わせれば、「二時過ぎに来る客がないから閉めるんだよ」ということになるか

もしれない。ともかく現状で誰も不都合はないのだから文句はない。

とはいえ実はこのシステム、われわれのような外国人の単身者、それも公的機関に勤めているものには実に不都合なのである。商社の駐在員は民間のペースに倣っているから、いったん正午に仕事をやめる。おまけに札押に行かない分、レストランでも人より早いものがある。またイエメン側の政府機関の内部で働いているのがJICA（国際協力事業団）の専門家などは、イエメン人と一緒に帰ればいいからまだよい。ところが、大使館で働いている場合は、主な相手は政府機関である。そこでこちらの仕事の時間はイエメン政府に敬意を表して午後二時までということになる。二時まではイエメン外務省から重要な連絡が入る可能性が（表向きは）あるからである。さて二時になってから昼飯を食べようとしても、そういうわけではとんどのレストランが閉まっている。そうでなくても十二時頃に昼食を食べる習慣で育ってきた人間には二時まで食べないことだってかなりな苦行である。開いているレストランを探してがらんとした町なかに車を走らせるとき、このシステムを開発した奴を呪いたくなることもある。ともあれ、午後二時にはイエメン人は待ちに待ったくつろぎの時間へ突入する準備ができあがっているというわけだ。

### 昼下が

昼下がりは屋外の活動には不向きな時間である。空気は午前中の突き刺さるような陽射しに焼かれてからからに乾いている。陽射しは肌に刺さればまだ痛いほど

強い。砂ぼこりは舞い上がったまま空中に漂っている。昼の礼拝と腹ごしらえも済んだ。

昼食後の二時過ぎから、店が再び開く四時半頃まで、町は閑散としている、表で動いているのは路地でサッカーをしている少年たちくらいなものだ。道行く車の数も少ない。昼下がりには働いている人は減多にいないから、この時間には買い物に出かけても開いている店は皆無である。みんな家の中にいる。といって昼寝をしているわけではない。暑くて湿気の多い海岸地方では多くの人が昼寝をするが、サナアをはじめ山岳地方では乾燥しているし、石造りの家の中にいれば暑さも気にならず快適なので昼寝をする習慣はない。

みんな家の中で何をしているのだろう。カートである。昼下がりには、仲間とともにカートをやりながら、おしゃべりとくつろぎのときを過ごす時間なのである。やることがないからカー



カートの木。1本の枝から取れるのは先端の若い葉6～7枚だけである。

トをやっているのではない。昼下がりのカート・パーティーは人々の一日の生活のうちで最も重要な意味をもっている。見ようによつては、イエメン人の一日はカートを噛むために存在するといつてもいいくらいである。

「カート」は榊に似た常緑低木で、学名は「*QATHA EDBULE*」、東アフリカと南アラビアに生えている。「カート」はこの木の名前だが、利用されるのは葉っぱだけである。葉っぱをどうするか。お茶のように煎じて飲むのではない、乾燥させてタバコや麻薬のように吸うのではない、料理して食べるわけでもない。噛むのである、生のまま。新鮮なカートの葉から滲み出すエキスには軽い覚醒作用・興奮作用がある。これだけならそれほど珍しいことではない。カートがおもしろいのは、その噛み方にある。

カートは噛んでエキスの出た葉っぱを、捨てたり飲み込んだりせずよく噛んで繊維を細かくくだいた後、片方のほつたと歯の間にため込むのである。カートのいちばん大事なポイントはこの「ためる」ことにある。それも数十から数百枚の葉っぱの噛みかすをぎゅうぎゅう詰め込むのである。かくして昼下がりのイエメン人は、ほつたにカートをたくさんため込んだコブとりじいさんに変身する。

カートは普通家の中で集まってしまうものだが、夕方再び店を開けて店番をしながら噛みつつけている人も多い。そこで夕方サナア旧市街の見物に出かけて、スークの男たちがことごとく

カートの花と枝



- (注) 1. 花をつけた枝 2. 花 3. 花の縦断面 4. 子房の横断面  
 5. 実をつけた枝 6. 実 7. 種子 8. 葉のへり 9. 苗木  
 (出所) Qat in Yemen, 表紙裏。

ない。みんな髭をはやした普通のほったである。どんなに膨らませてもちゃんと元に戻るのだから、人間の皮膚の伸縮性というのはたいしたものだと感心せずにはいられない。

カートの目的は社交であり、くつろぎである。だから、カートは基本的には一人で噛むもの



カートを噛みながら仕事をする  
ジャンビーア・ベルト職人

ほったをはちきらせんばかりに膨らませてもぐもぐやっているのを初めて見た外国人は「これは何という風土病ですか」とびつくりする。なかには野球のボールが入っているかと思うほど膨らんでいる人もいるのだ。もっとも男たちがほったを膨らませるのは昼下がりから夕方にかけてだけなので、次の日の午前中に同じ場所に行ってみても「風土病」の病人は一人もない。

ではなく、気のおけない仲間が集まって内輪でおしゃべりをしながら楽しむものである。もちろんカートそれ自身の「おいしさ」のために噛んでいる人もいるが、主目的はあくまでおしゃべりである。カートは麻薬ではないので禁断症状が現れるということはないが、習慣性があるという人もおり、隣のサウジアラビアでは麻薬に準じるものとして禁止されている。イエメンでは合法的な嗜好品である。

生の葉っぱなので青っぽい、生臭い味には違くないが「朝露に濡れた春の若草のなかに顔を埋めたようなかおり」と言えば言えなくもない。イエメン人にはたまらないのである。味なんて要は慣れの問題である。白状すればよく自身、イエメンで昼食に羊の肉などのご馳走を腹いっぱい食べたければ、そのあとで「ちよつと苦いめのカートが噛みたいな」と思うことがないでもない（正直言えば、ほぼ必ず思う）。この感覚は、例えばこつてりしたフランス料理を食べた後に、濃いデミタ



カートの葉の束。カートの売り方には二通りあり、枝ごと売る場合と、このように葉だけを束ねて売る場合がある。



ス・コーヒーが飲みたいとか、日本料理の後に抹茶を一服、とかいった感覚とほとんど同じである。もっとも食事よりもカートがメインであるという点では、食後のコーヒーやお茶とはずいぶん違うけれど。

機能としてはむしろわれわれにとつてのお酒に近いかもしれない。気の合った者同士集まり、おしゃべりをして、楽しいくつろぎの一時を過ごすための道具がカートである。親類が集まつて重要な親族会議を行うときにもカートは欠かせない。また政府の重要政策も、閣議ではなくカートパーティーで決まるという説が有力である。くつろぎ、あるいは根回しの場という意味ではカートパーティーは赤ちょうちんと同じ機能をもっているのだ。イエメンは禁酒国なのでカートは社交に不可欠なのである。ただし、カートを噛むための特定の店があるわけではない。カートパーティーは必ず個人の家で開かれる。個人的、閉鎖的なパーティーである。ほぼ毎日カートをやる人から、週に一度、週末にだけ噛む人まで頻度はまちまちだが、ほとんどの男はカートをするので、カートを噛まない者は社交の輪からはずれてしまう。社会生活を営むうえでカートは不可欠なのである。そして多くの男たちは毎日どこかでカートを噛んでいる。カートは二時頃から日没頃まで続く。昼下がりにはカートとともにゆったりと過ぎていくのである。

## 日没

イエメンで日常的に使われているのはイスラム暦で、これは太陰暦であり日本の陰暦と同じである。もっともイエメンでも外国人と接する機会が増えてきたので、新聞の

日付や、商取引の契約書の日付などは太陽暦である西暦（彼らはこれを正確にキリスト暦と呼ぶ）を併記するのが一般的になっている。だから外国人であるわれわれが普段生活するうえで、今日はイスラム暦で何月何日なのかを、それほど気にする必要はない。また七曜法をとっている、近い将来についての約束をするには日付ではなく「それじゃ、今度の月曜日に」というふうに曜日で言えばまちがいはない。イエメン人同士でもそういう日時を決め方をするのが一般的である。

しかし、だからといって「曜日を使えば安全」とたかをくくっていると危ない。ために、日没後しばらくしてからイエメン人に「今日は何曜日だい」と尋ねてみるとおもしろい。日暮れ前が水曜日であつたら、それに続く夜は（真夜中までは）まだ水曜日だという決まりにわれわれは従っている。ところが尋ねられたイエメン人はおそらく「木曜日だよ」と答えるだろう。イスラム暦では日付と曜日は日没とともにかわるのである（これは本来西暦でも同じだという説もある）。

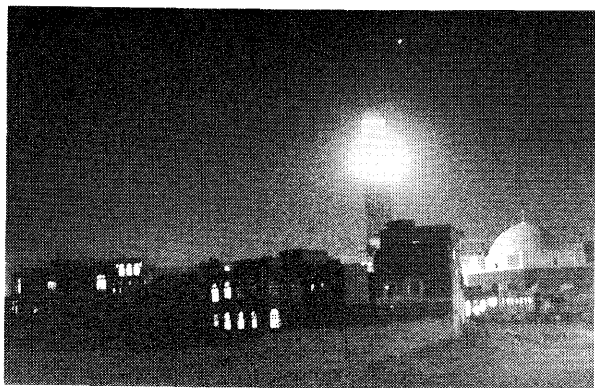
考えてみれば、時計のない時代に日付のかわり目を真夜中などという眼に見えないタイミンクに設定するのは無理がある。世界のどこにいつても一日は日の出によって始まり、日没によって終わるのが人間の自然な生活感覚である。これには日本人でも、アラブ人でも、ヨーロッパ人でも異論はまずあるまい。問題は、夜の位置づけである。夜が一日の終わった後のおまけ

なのか、それとも一日が始まる前のおまけなのかという点が問題なのだ。どうでもいいような気もするが、例えば現代日本では夜は一日の後のおまけでないと具合が悪い。残業の多いわれわれである、日没とともに日付が変わったのでは給料計算がめんどろでかなわない。

そこへいくと日没とともに門を閉ざしていた三十年ほど前までのサナアであれば、夜が一日の前のおまけでも一向にかまわないわけだ。山岳地の部族民たちにとっても事情は同じで、三十年前までは電気のある村など皆無であつたから、夜は用がなければ寝るだけのことである。夜に曜日を付ける必要もありはしない。

では、電気も入り夜も家の中で仕事ができるようになった現代のサナアではどうであろうか。欧米にならつて夜を昼間からの続きに変更するだろうか、たぶんしないだろう。敬虔なイスラム教徒であるイエメン人には、それではどうしても都合が悪いわけがあるのだ。それは毎年一度めぐってくる断食月ヘラマダーンの存在である。このひと月の間、イスラム教徒は男も女もみな日の出から日没まで断食をしなければならない。そのかわり夜の間に一日分食べるのである。だからラマダーン中は夜明け前に起きて太陽が上る前にその日の朝食を済まさなければならない。

さて、日付変更が重要なのはこのラマダーン月の最初と最後である。もし日付が日の出をもつてかわるなら、人々はラマダーン月の第一日を断食から始めなければならないことになる。



ラマダーン（断食月）中の夜の町。ラマダーン中はミナレットには煌々と灯がついている。

昨日までは通常のリズムで生活しているから、夕食は夕方七時か八時頃とったはずであり、今日の日没までほぼまる二十四時間ある。いくら信仰心が篤くとも、二十四時間何も食べないでいるのはつらい。だから暦は日没とともにめくらなければならない。サナアに住み始めてもないある日、たまたま真夜中の十二時近くにサナアの新市街を車で走ったら、いつもと様子が違う。普段ならこの時間には真っ暗なはずの通りに、煌々と電気がついていて軒並みレストランが開いているのである。ラマダーンは食べることから始まるということを知ったのはそのときであった。

そしてラマダーン月が終わると、待ちにまった「ラマダーン明け大祭」、一年でいちばんうれしいお祭りである。ラマダーン月の最後の日の太陽が没して、つらかった一カ月が終わるのである。日没と

ともにラマダーン月はきれいさっぱり終わってもらわなければ具合が悪い。断食は終わったのに、明日の日の出まではまだラマダーン月だ、などという半端なことでは断食をやりおさせた喜びも盛り上がらないではないか。そういうわけで、夜は一日の前になければならないのだ。

日没とともに日付が変わる以上、日没ははっきり意識されなければならない。現代の日本ではいつのまにか日が暮れていくのが普通で、いつ太陽が沈んだかなど気にする人はほとんどいない。しかしイエメンにいれば日本人でも日没に気づかないことはまずありえない。多少耳が遠い人でも、いやでも気づくように日没へマグレブの礼拝への呼びかけが、ラウド・スピーカーを通して町中に響きわたるからである。スピーカーは町に限らない。山の中でも、砂漠の中でも人がある程度住んでいる集落には必ず礼拝所へマスジドがあつて、日に五回の礼拝を呼びかける。そのうちで最も重要なのがヘマグレブの礼拝なのだから、スピーカーの音量も最大になろうというものだ。人が住んでいないところでは、電気がないのでやはり日が沈んだのはわかるという仕組み。

かくして、イエメン人の昼と夜は日没の礼拝によって厳然と区別される。

### 夜

日が暮れば夜になる。砂漠の遊牧民ベドウィンに限らず、アラブ人は夜が好きであり、月が好きである。イエメン人も例外ではない。アラビアの昼間の太陽は容赦なくわれわれの頭上に君臨し、暑さと渇きという苦しみを与える。だからそれは畏れの対象である。それ

に引きかえ夜は、昼間の間に痛めつけられた大気がかすかな湿り気と精気を取り戻すときであり、月の光は柔らかく静かに地上を照らす。だから月はいとおしみ、いつくしむ対象である。

サナアは海拔二二五〇メートルの高原にある。空気は乾燥しており、昼間のはこりが静まった夜の大気はいっそう澄んでいる。天を見上げれば、宝石箱をひっくり返したような天の川の星たちと、われわれの目との間を遮るものは何もない。月も日本で見えるよりもずっと凛々しく見えてくる。サナアにいてさえそうだから、あかりの少ない田舎に行けば地上が暗い分なおさら月が明るく見える。高層ビルのかげになったり、地上の明るさにかすれてしまっている東京の月に比べて、この月にはるかに存在感が大きい。

存在感が大きいのは、なにもその明るさのせいだけではない。イスラム暦は陰暦なので、月の満ち欠けで日付がわかる。人は月の形を見て、あと何日で断食月が始まるとか、あと何日で預言者ムハンマドの生誕記念日だとかを知るのである。そんなことくらいならカレンダーを見てもわかりそうなものだが、残念ながらイエメンはその文盲率の高さで並みいる途上国のなかでも最高位のグループにランクされているのである。農村部の成年女子の文盲率は今でも九〇%近く、文盲であればカレンダーが読めない道理である。そもそもカレンダーなど家に置いてない場合が多かったのだ。必要ないのである。夜空に誰にでも読める大きなカレンダーがあるのだから。

さて現代イエメン人が夜を好むもう一つの理由は家の中にある。それはテレビである。イエメンは一人当たり国民所得の額では、世界でもかなり下のほうにランクされる途上国だが、テレビの普及率は同レベルの他の国々に比べて非常に高い。一九七〇年代以降、イエメンではお隣の石油大国サウジアラビアへの出稼ぎが大流行となり、一家で少なくとも一人の男が出稼ぎに行った。そして彼らは皆お土産にテレビを抱えて帰ってきたのである。なかには親戚の分まで買ってきた者もいたし、さらに余分に買ってきて、出稼ぎに出ていない家に売った者もいた。だから田舎でもかなりの家にテレビがある。

チャンネルは統一以前は国営放送が一つだけであったが、統一後はサナアでもアデンの放送が見られるようになったので二チャンネルになった。放送は夕方四時くらいから。まず宗教番組から始まる。そのあとは子供向けの漫画が多い。われわれも小さいころ見たアメリカものが優勢だが、最近では日本製の漫画がしばしば登場する。「宇宙戦艦ヤマト」「赤き血のイレブン」や、題名は忘れたが「母をたずねて三千里」をテーマにしたものなど多種多様である。たいていレバノンあたりで吹き替えをしており、登場人物はちゃんとアラビア語を話すので、ストーリーを知っているわれわれにはアラビア語の勉強になる。挿入歌は日本語のままだったりするのもなつかしい。「宇宙戦艦ヤマト」ならストーリーも分かりやすいからおもしろいだらう。またサッカーが好きなアラブ人には「赤き血のイレブン」に人気があるのもうなずける。

でも電信柱にブリキの広告が張つてあるような長屋のシーンが出てくると、イエメンの子供にこの風景がなんだかわかるだろうかと心配になる。

「ヘマグレブ」の礼拝の間は、画面にメッカのカアバ神殿の写真が静止画像で映し出され、番組は中断される。その後は曜日によつて違うバラエティー番組があつて七時半から英語のニュースである。英語の刊紙がないイエメンでは、外国人にとつてこれが唯一の情報源である。それから歌番組、これはエジプトものが多い。たまにイエメンのスタジオで製作したモノを流すが、背景のきらびやかさでエジプトに一日の長がある。

九時からアラビア語のニュースである。ただし時報と同時に始まったことはまずない。アラビア語の新聞が何種類もあり、ロコミでニュースを知るイエメン人にとつては、このニュースはほとんど意味のない情報源である。「だつていつでもおんなじなもの」と言うのが一般的な評判。ニュースが終わると日によつて、ヨーロッパのサッカーの試合だったり、引き続きエジプトの歌番組だったり、イエメン放送局制作の「イエメン紀行」だったりする。

そして最後にドラマになるのだが、どうやらイエメン人は男も女もこれがお目当てでテレビを見てゐるらしい。ほとんどがエジプト製のメロドラマやコメディで、たいてい何夜か連続で放映されるが人気があるのはメロドラマ。われわれの目にはどのドラマでも、いつも男が両手を上下させて怒鳴つていて、女は髪の毛をかきむしりながら泣いてゐるような気がする。言



葉はアラビア語だが、エジプト方言なのでイエメン人がふだん使っているイエメン方言とは、東北弁と大阪弁くらい違うのだが、イエメン人は聞き慣れているので理解できるらしい。ただししゃべれといわれてもしゃべれない。

十二時頃になると、はたらく国旗の映像と国歌を背景に放送は終了する。どんなに宵っぱりのイエメン人でもたいていはこれでテレビの電源を切って床に就く。田舎ではテレビは自動的に切れる。十二時で発電機が止まるからである。